

I. リスクとしての高TG血症

1. 疫学研究からみた高TG血症の意義

新潟大学大学院医歯学総合研究科血液・内分泌・代謝内科 助教

山田 貴穂

同 血液・内分泌・代謝内科 教授

曽根 博仁

[Summary]

動脈硬化性心血管疾患は、LDL低下治療だけではまだ完全に防止できず、その「残存リスク」への介入が今後の課題である。近年の疫学研究から、トリグリセライド(TG)もそのひとつであることが判明しており、特に非空腹時TG値と心血管疾患との関連が注目されている。高TG血症の背景のひとつにはインスリン抵抗性があるため、肥満の有無にかかわらず、将来、耐糖能異常の発症も危惧される。また、2型糖尿病患者では心血管疾患(大血管障害)予防のため、両病態の根底にあるインスリン抵抗性改善が重要と考えられる。

はじめに

動脈硬化性疾患、特に心血管系疾患の予防において脂質の管理は重要であり、総コレステロール(TC)、LDLコレステロール(LDL-C)、HDLコレステロール(HDL-C)の重要性を示す疫学研究が数多く報告されてきた。LDL-Cはプラーク内容そのもので、強力なHMG-CoA還元酵素阻害薬(スタチン)によるLDL-C低下作用が、冠動脈疾患(coronary heart disease; CHD)や脳梗塞の一次予防、二次予防に有効であることが示されている。

一方、トリグリセライド(TG)と心血管疾患の関連については、議論が分かれるところであった。TG値が食事内容やアルコール摂取で変動しやすいこと、原発性だけでなく糖尿病やメタボリック症候群などに関連した続発性の高TG血症も多く病態が多岐にわたること、HDL-C値との関連から統計学的独立性に疑問がもたれてきたことなどで、統一した見解が出にくかったと思われる。しかし近年の疫学研究から、心血管疾患における高TG血症の重要性が認識されるようになり、さらに非空腹時TG値の意義も注目されている。高容量のストロングスタチンでLDL-Cを完全にコントロールしてもイベントの再発を完全には防げず、その「residual risk(残存リスク)」への介入が必要とされているが、TGはそのひとつにあげられる。

ここでは、TGと心血管疾患や全死亡に関する疫学研究、

Key Words:

トリグリセライド 心血管疾患 疫学研究

インスリン抵抗性 残存リスク